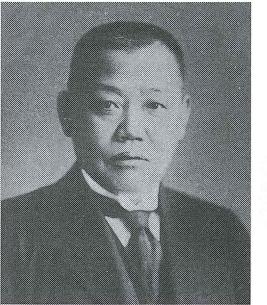


祖父「柳田富士松」を探る

柳田辰巳



(1867 - 1928)

この題を与えられてまず考えた事は

余りにも祖父の一生を知らないと言う事であった。私が昭和三年一月二十四日に生まれ、祖父富士松が亡くなつたのが二月九日、共に生きた期間は僅か

二週間ほどで、当然、祖父の面影も記憶も全く残つていません。父母や叔父叔母より側聞したことも「私の名辰巳は実家松原の屋号より名付けたと言う事」、「晩年の富士松は寒がりで家の出入口には明けたら閉めよと大書してあった」、「息子を追い出しても嫁を大事にしたい」、「大里製糖所を売却後その金の使い道で、富士松は阪神間に土地を買おうと言い、金子翁は工業に使おうと主張し、これが唯一の意見が合わなかつた事」、「園川氏（中央毛織工場長）の事を人に聞かれ、「就業時間三十分前には机に向かつて新聞を読んでいる殊勝な若者」とか僅かしか聞いていないからである。従つてこの文は神戸市灘区の宝珠山祥龍寺に残る頌徳碑の碑文を骨子として祖父の足跡を探ることにした。

『柳田富士松翁は、大阪の侠商（男気のある商人）松原恒七の長男に生まれ、姻戚柳田家を嗣ぐ。』

『かね辰』辰巳屋をついだ恒七は非凡な才能と太腹な性格の持ち主で、大阪商人には珍しい侠客肌の伊達もので丁度紀の国屋文左衛門を偲ばせる、態の男であつた。

この様な事例として引継いだ煙草入れの商売だけではあき足らず、当時まだ鎖国の世であつたが密かに中国人と取引を始めて、砂糖・鼈甲・象牙・珊瑚類の貿易に手をのばしこれらを加工して、それぞれ當時流行の袋物の根付けや三味線の撥や髪飾りとして売り出した。

大宝寺町の店は間口一間（約四メートル弱）位の店であつたが、商運の開けると共に奥行二十間（約三十六メートル）倉庫も二つまで並ぶ様になつた。鎖国が解けてからはますます商売の規模を拡張して、大宝寺町の店が手狭になり地の利を得た船場の長堀北詰に店を移した。

開港景気に沸く神戸に目を付け此処にも支店を置いて、大阪本店は番頭藤田助七に委ね、自分は神戸で送る日が多くなつた。此處へ外人が言葉が解らぬままジャワ糖を売りに来て引取つた物を、煎餅に入れ焼いて旨いと納得し、素早くこの砂糖を外人の船と交渉買込み、之を四方八方の菓子屋に売り込んだ。

恒七は大阪に三つの店を持つたが、一本立ちした夫々の番頭に譲つたり其の他店分けの型をとらずに始めから陰で彼が面倒を見た事業も相当あつたらしい。

須磨の敦盛塚の傍に名物敦盛そばがある、ある日恒七が食べに行つて見ると、その蕎麦屋は如何にも貧弱な茅屋（粗末な家）で、名所旧蹟の名にふさわしく無い。彼は大いに憤慨して、自分で大工を連れ立派に建築してやつた。

又土用の丑の日に近所の鰻屋に命じ鰻を総買上げし、大河へ逃がし鰻供養したのである。晩年中風にかかり、口が不自由になると、用件を書いた木札を作り座敷に並べて竹の鞭で指して用を弁じたそうである。俠斜な（男氣をくむ）生活で相當金を遣つたが、只の無駄使いせず彼は儲けた金の一割を有用に楽しみに遣うのだと言つて居た。

話は変わるが、先に恒七の妹はるが嫁いだ柳田卯兵衛に子種がなかつたので、慶應三年八月三日生まれの富士松は十三歳の時柳田家の養子になつた。

『資産謹嚴美直、質朴穩健の士也』

神戸製鋼の浅田長平元社長が富士松の性格を評して、細心な方だけに眞面目で義理堅く信用を重んずるのであつた。商売は堅実主義で大きな疑惑せず、買い付けた品物は早く売り捌いて万一本値下がりを受けても大きな痛手も蒙らぬ様用心深く、何処までも堅実にやつていた、

頌徳碑

『柳田富士松翁は大阪の侠商松原恒七の長男に生まれ姻戚柳田家を嗣ぐ。資性謹直質朴穩健の士也十九歳の時鈴木商店に入り店主夫妻の薰陶を受く長ずるに及んで同店砂糖部を擔任し店主没後は専らよね刀自を佐け大に才腕を振ひ商權を拡張して主家發展の基礎を築き金

佐扶掖し克く我が財界に鈴木商店の大さしめたり昭和三年二月九日

脳溢血の為に逝く享年六十二歳也』

をそれぞれの小題にして、白石友次著『柳田富士松編』を中心に他の資料を隨時参照して、より現代表現でエピソードを抜粋記述する事とした。

店に着いて主人夫婦に対面し「御奉公致したく訪ねて参りました」

と話すと喜んで迎えて貰つたが、店主岩次郎の言うには「俺はお前のお父に随分世話をなつた、お陰で今ではどうやら此の通り店をやつて行ける様になつた。俺も主人に恩返しの積りでお前を一人前に仕立てやるが、主人の子供だからと言つて決して甘やかしたり特別に勞つたりはせんぞよ。他の奉公人並に朝晩の勤めを怠つてはいかぬぞ」ときつく戒められたのであつた。

よく彼等をして終生鈴木の為に身を粉にして働かしめた由縁は、何と言つても賢夫人およねさんによく人を容るる寛容の度量と、人を巧みに使う仁慈の特遇によると言わねばならぬ。

明治二十一年の二十一歳頃である、今の青年なら生意氣盛りの年頃であるが、彼等二人は鈴木商店の唯一の商売たる砂糖の売り捌きに真黒になつて働かされた。砂糖の注文取りに草履がけで、東は京都、西は明石姫路まで徒步でテクテク街道の塵を浴びて行く、然も一日十銭の手当てを貰つて一日掛かりである。明石へ行帰りに草履二束を切つて弁当代を使い、それで三銭四銭をため込んで居た。行商も随分辛い物であるが、店へ帰ると御寮人よねさんに御苦労御苦労と言わると、母親のないだけに、くたびれても不平も言えなくなるとは生前彼の語り種であつた。

『店主没後は専らよね刀自をたすけ、大いに才腕を振るい、商權を拡張して主家発展の基礎を築き、金子翁と共に同店の二大柱石として世に知らる。金子翁が天衣無縫の躍進の陰には、常に翁が緊密周到の守備有り。』

富士松は鈴木商店草創の頃から砂糖部を担任して、その穩健着実なる才能を振るつたのである。一時世間では金子は計画し、西川は実行し、柳田はその収穫を最も堅実に取入れる役で、共に鈴木家の家老格

であるが、さしづめ柳田は大目付けであると言われた。

この大目付の柳田が石部金吉金兜として、帳簿や銀行の交渉を一手に引受けた。居た間は、鈴木商店は堅実第一主義であった。第一次世界大戦以前のやり方は、神戸や大阪の各銀行に定期預金を何百何千円と預けて置いた、従つて銀行に対する信用は絶大であった。偶々俄かに金の必要が生じたら、その定期預金を担保として借りて使つたものである。其の頃鈴木の裏書きがあればどんな手形でも割れるし、何れの子会社の手形でも容易に切れたものである。

かかるエビソードのひとつとして、三井物産が内地樟腦を取り扱い、樟腦油を鈴木・池田に荷渡し再製樟腦となし、其の引取る迄の保証に鈴木商店より一口金五万円の定期預金証五枚、金高二十五万円を三井に提供し三井は之を専売局に預けて、一ヶ月の約束にて樟腦油を引き取りしたことがある。この仕事は一年後三井物産が違約し三井が独自で工場設置すると唱えたため鈴木と池田は連名で書留郵便を出し解約してしまい、内地樟腦は自由にして一年前の契約解除を申出た。然るに三井物産ではかねて鈴木より預かっている二十五万円の定期預金を、正金銀行に米綿輸入の荷物引換書に要する資金に流用していたので、直に返還することが出来ず、松島誠が再三交渉したが結局、樟腦油問題を別にして三井を信用して貸すという富士松の温情ある計らいで、該定期預金は六・七月後三井から無事に返還された。その後も三井で多くの資金のあつた場合、一定の貸料を払つて鈴木から融通を受けた事がある、三井では三井本社より借りる借金は金利が意外に高いので、なるべく他所で借りる方針であつたらしい。商売でも一々本社の許可を要し、手持ち商品でも一定量以上は仕入れることが出来ぬで、自然ブローカーを主とする様になつたとのことである。

大陸から意氣揚々と神戸に帰つて来た。

話は変わるが、日商四十年の歩みに依るとジャワ糖の生産量はピーク時で年間二百九十万トン程度だったが、鈴木商店はその約二割を取り扱つたといわれてる。

鈴木商店焼き討ちの事を書いた「黒い米」の著述を引用すると、人力車の車夫の話を富士松は苦渋に満ちた顔で領きながら、腹の中は煮えかえつてた。市民から怨まれる程鈴木は悪い事をしたのだろうか、自分等は天地神明に恥じない気持ちで居たが新聞の扇動で市民は鈴木を目の敵にした。これを糺す方法はなかつたのか、新聞を甘く見ていたのは間違ひであつた。もつと早く手を打つておけば、ここまで怨嗟の的にならなかつただろう。今更ながら筆の力の恐ろしさをしみじみと感じた。相生橋署へついて署長室に通された富士松に、署長は鈴木の幹部が群集の中をよく無事に来られたと不思議がつた。「署長さん、本店は無事ですか、社長（よね刀自）も無事なのでしょうか」富士松は椅子に坐るなり聞いた。「本宅はお店がやられる前に襲われました。社長はどうしていらっしゃりますか、多分巧く逃げられたと思いますが、はつきりした事はまだ分かりません」「じゃこれから、本宅まで行きましょう」と富士松は立ち上がつた。「柳田さん、それは危険です。彼等はいつ貴方に危害を加えんとも限りませんから、今夜はここに居て下さい。社長の御安否は部下に探らせますから、出ないで下さい。

工作ではその石の様に固まつて売り物になりません」と職人が騒ぎ始めた。神戸より大里へ駆け付けた金子・柳田の二人は「出来た時はサラサラしているが、一晩のうちに固まつてしまふ」と聞かされ、金子翁は「柳田君こうなつたら君の独壇場だ。中国で売ろうや」の一言で富士松は二代目岩次郎等を数人連れて香港に飛び出した。金子翁は、たまたま前会社重役の芸者遊びに愛想を尽かし、就職に來た元日本精糖の職人があり、その職人を雇うことで問題を解決した。富士松の方は固い砂糖の中に銅錢を入れて売り出し、「鈴木の砂糖は錢がでる」の噂を画策、宝くじの心理で販路が広がり、一行は

書類一つ持ち出す事もなく全焼するなど、これから先の仕事にどの位

支障をきたすか、建物ぐらいいは今の鈴木にはものの数ではないが、書類を焼いた事は鈴木の存亡に拘ることと考へ、部下に「事情を電文に纏め東京の長崎英藏支店長に電報を打ち、金子さんにすぐ連絡してくれ」と命令した。金子翁の所へは東京行の夜行列車に静岡駅で「ホンテンヤキウチサル」と東京支店より転送された。翌朝であろうか西川文蔵支配人と二人で県警本部を訪れ、強談判の上「よろしい。警察の方で出来ないなら、私の方で正当防衛をやらしてもらいますから、然様ご承知願います」とその方法を強引に説明納得させ、帰途神戸署・相生橋署を回り了解させた。

『終生管鮑の交わり（中国の春秋時代の斎の管中と鮑叔とが貧しかつた時から豊かになるまでその友情が変わらなかつた事）をなし、互いに補佐扶掖し、よく我が財界に鈴木商店の大さしめたり。』

前述田宮嘉右衛門伝に依ると、金子翁が珍しく西宮紡績の買収に失敗し、富士松に愚痴をこぼすと「あかんあかん、そんな未練だしたら、どうやら此處にある見積書に書いてあるが、鉄で釘でも作つて見たら」とこの時は二人の特色はあべこべで、富士松の方が前向きで積極性を示し、ハッパを掛けたとは面白い。

また「松方・金子物語」にも、すると金子が頭をもたげた。「釘、建築の釘か。国内向けにも輸出にも釘は売れるやろ、やってみよか」二人はその書類を読みふけつた。火鉢の火は赤赤と燃えている。神戸製鋼所誕生の記念すべき一刻である。

この様な金子、柳田両氏の親密な友情ぶりについては、鈴木王国二つの宝、金子さんに柳田さん、竜虎とでも言うか、その金子さんは何処までも良人の立場、世界的な大きな事業のやりっぱなし、柳田さんは忠実温良な奥さんの立場で文句一つ言わずにコツコツと跡始末す

店主二代目鈴木岩次郎弔辞

「鈴木商店取締役柳田富士松君ついに逝けり、悲しいかな。顧るに君は明治十八年二月初めて我が商店に入り、爾來勤続四十有三年其の間獎順匡輔（薦めて従い行う）の功少なからざりしのみならず、久しく本店重役として店務を總覽し、兼ねて幾多分身関係会社重役の班に列し（グレープに連なる）貢献する所頗る多かりき。然して君は我商店の最古参者にして、金子直吉君と共に商店の柱石として声望中外に高かりしに、一朝疾（病気）を得てまた起たず、痛恨いづくんぞ禁じえん。君資性温恭篤実、夙夜（朝早くから夜遅くまで）店務に没頭して終始渝らず、金子君をして常に安んじて対外的活動に当ることを得せしめし所以（わけ）のもの、もとより君が内助の功に頼らずんばあらず。もしそれ君が砂糖に関し深き造詣と非凡なる手腕の所有者たることは、衆人の等しく認めて驚嘆せし所也。ああ畢生（終生）の心血を主家の事業に傾倒し、倒れて後止みたる君の如き人は真に世間観ること希なり、誰か欽仰（敬い慕う）せざる者あらん。本日ここに葬儀を行はるるに臨み、往時を追憶（昔を思つて懐かしむ事）して哀惜の情ことに切なるもの有り。謹みて一言を述べて弔意を表す、願わくば響けよ」

金子直吉弔辞

「謹みて故鈴木商店取締役柳田富士松君の英靈に告ぐ。一昨年六月君の不幸にして病にかかりし以来、予等は輓近（近頃）の店情に顧み療養効ありて一日も早く回春の喜びを共にしうるに至らんことを、祈らざる日とてはなかりしなり。然るにいづくんぞ料らん（推測出来ない）本月九日病俄かに改まり午後一時、溘焉（たちまち）長逝せられんとは、薬石其方を尽し、看護其人ありしと雖も命数定まりあり、人

る。この理想の夫婦の睦まじさと言つたら、世にも珍しい一大宝鑑とも言えるだろう。私（高橋半助鈴木商店元重役）の五十年近くその支配下にあつた間、ただの一度もどちらの陰口を聞いた事がない。表面はともかくも同じ立場で同じ仕事をしていれば、大抵は必ず不平不満も出るもの、このお二人の結束はガッカリとして寸毫の隙もなし不満不足の氣配さえなかつた、双方の呼吸がピッタリと合つてだからで正にこれ不思議な天の配剤であつた、と同時にこの不思議な結合は、また鈴木商店を造り成した最大の原動力であつたと思う。お家さん（よね刀自）を中心にして実に円満明朗、そしてたゆみなき元気な活躍でかの大鈴木商店の大所帯は築き上げられたものであつた。

『昭和三年二月九日脳溢血のために逝く享年六十二歳也』

白石友治氏は次のような一文を記している。

日本で一番多く砂糖を売り、砂糖の味も品質も十二分に解り、また一番多く砂糖の妙味を嘗めた故か、大正十年頃より富士松は糖尿病を患い、砂糖の代わりにサツカリンを使つてた。大正十二年頃より手足が痺れる様な兆候がでた。

今から推測すれば糖尿病が動脈硬化を起こし、六十二歳で脳出血で倒れたと思われる。

最終章に当たり矢張り柳田富士松の鈴木商店に対する功罪を筆者として取上げない訳にはいかないと考へ、恣意的に感想を述べて見ます。まず功ですが近親者としてより、皆様有識者の方が適當と考へお任せ致します。罪の方は富士松自身と同じ主義思想手法を教えた後継者に人を得なかつた事、此の点曾祖父松原恒七に比して怠つた所と思います。最後に弔辭を記し、併せて富士松が引受けた会社役員の経歴を記して文を終りたいと思います。

力之を如何ともする能わざるか、嗚呼悲しいかな。回顧すれば予は入店以来ここに四十年の久しきに渡り、君と形影相伴い長短相補えて、こつこつ商店の經營に従い休戚（喜びと哀しみ）を分からし苦樂を共にして今日に至りし者、今その喪に会い真に骨肉兄弟を亡いたるの感あり、痛恨いづくんぞ禁じえん。殊に方今世路難嶮（むつかしくけわしい）店情旧の如くならざるの時、商店の柱石たりし君の逝去は予等が空前の一大打撃にして、哀惜措くあたはざる所となると共に、商店の償（アガナ）うべからざる一大損失として浩歎（大きいになげく）ひすんばあらざる也。君、天資温厚和惇（おとなしく純真な）身を持すること謹厳にして所謂風流の道を好まず、常に真情を傾きて人に接せり。君の在る处春風座にみちて、德望中外に高かりしもの固より宣なりと言うべし、吁嗟（ああ）往時を追憶して今に及べば感慨無量、また多くを言う能（あた）わず唯弔涙の滂沱（ぼうとつ）（盛んに流れる）たるあるのみ、冀（こころが）は英靈の加護長へに（長くお守り下さい）商店及び関係諸事業の上に在らん事を。」

弔句

千代までも 余香やつきじ 梅の花
南無阿弥陀 涣も涙も つらなり

鈴木合名会社理事

初代豊年製油株式会社社長

株式会社神戸製鋼所監査役

大正生命保険株式会社監査役

揺れ動く巨大産業（鉄鋼）の狭間にて

須藤欽吾

・『豊年製油二十年史』昭和十九年発行

・『金子柳田両翁頌徳会』（金子直吉編）（柳田富士松編）昭和二十五年発行

・『松方・金子物語』兵庫出版社昭和三十五年発行

・『黒い米』武田芳一著 のじぎく文庫 昭和三十八年発行

・『神戸史話』創元社（落合重信・有井基編）昭和四十二年発行

・『鼠』城山三郎著 文芸春秋 昭和四十一年発行

・『伝田宮嘉右衛門』（初代神戸製鋼社長）鉄鋼新聞社昭和四十三年発行

・『日商四十年の歩み』日商株式会社昭和四十三年発行

・『海鳴り止まず』神戸新聞社昭和五十二年発行

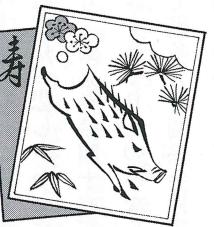
・『総合商社の源流 鈴木商店』桂芳男著 日本経済新聞社昭和五十二年発行

・『鈴木商店と金子直吉の人間像』桂芳男著 別冊神鋼タイムス昭和五十九年発行

・『行け！まっしぐらじや』辻本嘉明著 郁朋社 平成十一年発行

・『日塩五十年史』日塩株式会社 平成十一年発行

・『神戸の鈴木商店』王鞍延子著 平成十二年発表



特殊鋼の特性を与える合金元素にニッケル・クロームのような多量に用いられる元素と微量で有効な元素があり、太陽鉱工は後者の中モリブデン・バナジウムの鉄合金の製造販売を主とする会社である。太陽鉱工が鉄合金業界参入に際して、東大三橋鉄太郎、東北大今井勇之進両先生の強力な力添えがあつた。太陽鉱工は島根県にモリブデン鉱山を持ち、本邦で最初のテルミット法を実施した仙台のフェロチタン工場の技術を赤穂工場に移し、本格的生産を行なつて來た。技術的确立を遂げるや、製品の消費大手新日鉄への売込みには同社、的場副社長の援助を受けた。

又バナジウムについては、伊予工場で重油燃焼灰よりの回収技術確立後、坂出のグループ会社泰和で使用済み重油脱硫触媒よりバナジウム及びモリブデンを回収していた。

尚この使用済み脱硫触媒処理については、日本の産業の隆盛とともに増大する燃料石油量に伴なう使用済み脱硫触媒量増大を見込み、日本鉱業佐々木社長と計り、合弁会社サンマインを設立、赤穂工場で操業を開始した。しかし、その後の業界衰退に伴ない止むなく解散し、縮小後の事業は赤穂工場で続��ることになつた。

次に最近世界的に揺れ動いている日本鉄鋼業界の歴史を略記する。

安政二年大島高任が釜石鉱山を開発、四年洋式高炉製錬を行なつた

のが始まりという。明治十二年福沢諭吉が「民情一新」中で製鉄を文明開化の要と述べ、翌年官営製鉄所釜石で操業開始したが二年で休止した。

明治二十四年松方正義首相が官営製鉄所建設案の作成を野呂景義に命じ、二七年の日清戦争勃発で設立機運が高まり、翌年帝国議会で建設決議が行なわれた。燃料石炭产地を控える八幡村が選ばれ、鉄鉱石は清国大治鉱の輸入契約が成立し、三四年作業が開始された。日露戦争前後鉄鋼産業が生まれ、住友金属、神戸製鋼、川崎重工、日本钢管の民間企業が相次いで参入した。第一次世界大戦時には生産量は半官半民となつたが、終戦とともに不況に入り、昭和初期の金融恐慌、世界恐慌のため、業界の再編、合理化が叫ばれ、昭和九年八幡を中心とする日本製鉄が創立された。第二次大戦に突入するや伸びは漸減し、終戦時には生産量は激減した。

終戦後連合国との制約を受けたが、ドレーパー案により、鉄鋼設備の賠償撤去は免れた。昭和二年吉田首相の下で、土佐生れの有沢東大教授（筆者と同じ独人よりドイツ語を学ぶ）の傾斜生産方式が実施され、鉄鋼業の復興が早められた。二五年企業再建整備法により八幡、富士分割、統一二次合理化で、川鉄千葉、住金和歌山、神鋼脇浜といつた一貫メーカーが出来、さらに三次合理化で生産量が増大したが不況に見舞われ、四五年には八幡、富士が合併して新日鉄が誕生した。この時独占禁止法に触れる公正取引委員会の有賀委員（鈴木商店支店長の娘で東北大出身）らが強硬に反対したが潜り抜け成立し、戦後最大の合併と言われた。

その後韓国には日本の援助でホコー製鉄所が建設された。筆者も見学したが君津製鉄所のレイアウトに似ているのに驚いた記憶がある。

同じく中国では宝山製鉄所が建設され、次第に力を増大し、平成十六年には粗鋼生産世界一となつた。インドでも廃船処理による屑鉄生産が行なわれた。日本でも電気機器製造の伸びに加えて自動車などの旺盛な鉄鋼需要に応えて大手各社の高炉能力増大が進んだ。

本年に入つてインド人ラクシユミ・ミツタルの率いる世界一のミツタル・スチール（オランダ）が二位のアルセロール（ルクセンブルク）を併合して世界一企業となり、次に合併すべき会社を虎視眈々と狙つてゐる。

我が国でも既に体力増強のため、川鉄、日本钢管が統合してJFEをつくり、新日鉄は住金工、神鋼に加えて、韓国のポスコ（旧ホコー）とも提携し、さらにブラジル鉄鋼大手ウジミナスへの出資率引き上げをはかつてゐる。既にアルセロールともグローバル戦略提携契約を結び、宝山鉄鋼とも三社合弁で自動車用鋼板製造を行なつて來た。

他方三角合併など油断ならない法律的な難題が控えていることも忘れてはならない。

正に国際競争力強化は規模拡大にありと、大企業への傾向は現代世界の趨勢になつてゐる。確かに、鉄鋼生産方式が現状踏襲される限り、この流れは変るまい。